

名著精選

心の謎から心の科学へ

〔全5冊〕

〔編集委員〕

梅田 聡・柏端達也・高橋雅延・開 一夫・福井直樹

人間の心はどのようにはたらくのか——古来、哲学者ならずとも、無数の人々がその謎を胸に抱き、思弁をめぐるせてきました。その中から、傑出した科学者が、科学として取り組める形で問題を設定し、現代の先端研究につながる重要な議論を提出しました。学史における必読の古典であり、今なお洞察の源泉となる名著を、哲学、心理学、言語学、人類学、計算科学、神経科学、生理学など幅広い分野から精選してお届けします。

四六判・並製カバー・平均 320 頁

全巻の構成

感情 ジェームズ/キャノン/ダマシオ
梅田 聡・小嶋祥三 監修

第3回配本
6月刊行

自由意志 スキナー/デネット/リベット
青山拓央・柏端達也 監修

第2回配本
5月刊行

本体3600円 ISBN 978-4-00-007797-2

言語 フンボルト/チョムスキー/レネバーク
福井直樹・渡辺 明 監修

無意識と記憶 ゼーモン/ゴルトン/シャクター
高橋雅延・巖島行雄 監修

人工知能 チューリング/ブルックス/ヒントン
開 一夫・中島秀之 監修

第1回配本
4月刊行

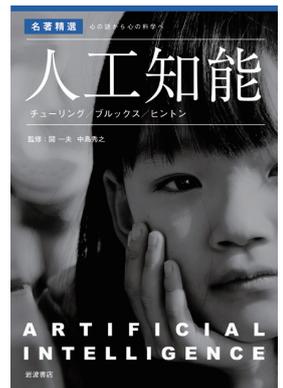
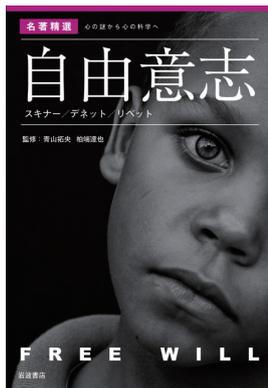
本体3000円 ISBN 978-4-00-007796-5

特色

- ◆本邦初訳の作品多数。既訳のある作品も、すべて読みやすい新訳としました。
- ◆監修者によるイントロダクションで、収録作品を学史に位置づけて概観します。
- ◆各作品に要約・解説となる導入文を付します。

編集委員

- 梅田 聡(うめだ・さとし)
慶應義塾大学教授 認知神経科学
- 柏端達也(かしわばた・たつや)
慶應義塾大学教授 行為論・現代形而上学
- 高橋雅延(たかはし・まさのぶ)
聖心女子大学教授 実験心理学
- 開 一夫(ひらき・かずお)
東京大学教授 発達認知神経科学・機械学習
- 福井直樹(ふくい・なおき)
上智大学教授 認知科学・理論言語学



洞 察 の 源 が こ こ に あ る

岩波書店 〒101-8002 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5 TEL 03(5210)4000(案内)

感情

ジェームズ／キャノン／ダマシオ

梅田 聡・小嶋祥三 監修

◎収録著作◎

ウィリアム・ジェームズ「情動」(『心理学原理』第25章)(1890年)

ウォルター・B. キャノン『痛み、空腹、恐れ、怒りに伴う身体変化：情動の興奮の機能をめぐる最近の研究報告(第2版)』より抄訳(1929年)

アントニオ・R. ダマシオ, ダニエル・トラネル, ハンナ・C. ダマシオ「ソマティック・マーカーと行動指針：理論と予備的検証」(1991年)

情動の生起が身体すなわち自律神経系の活動に端を発するという仮説を述べたジェームズ(William James 1842-1910)、その説を一部否定しつつも生理学的な根拠に基づき新たな考えを提案したキャノン(Walter B. Cannon 1871-1945)、現代の神経科学的成果に基づきソマティック・マーカー仮説を提案したダマシオ(Antonio R. Damasio 1944-)を取り上げ、感情と身体活動の関係の理解がどのように深化してきたかを跡付ける。

自由意志

スキナー／デネット／リベット

青山拓央・柏端達也 監修

◎収録著作◎

B. F. スキナー「人間とは何か」(『自由と尊厳を超えて』最終章)(1971年)

ダニエル・C. デネット「人であることと自由意志」(『ブレインストームズ』第4部)(1978年)

ロデリック・M. チザム「人間の自由と自己」(1964年)

ベンジャミン・リベットの実験をめぐる論争(チャーチランド(1981年)／リベット(1981年)／サール(2000年)／リベット(2001年))

行動主義心理学の立場から「自由」概念に対して挑戦的主張を行なったスキナー(B. F. Skinner 1904-1990)の古典的な著作、哲学的問題としての考察の根本的構図を示したチザム(Roderick M. Chisholm 1916-1999)の論文、現代の傑出した両立論者デネット(Daniel C. Dennett 1942-)の代表作、リベット(Benjamin Libet 1916-2007)が自らの有名な実験をめぐるチャーチランド(Patricia Churchland 1943-)、サール(John Searle 1932-)と行なった二つの論争を収録。

言語

フンボルト／チョムスキー／レネバーク

福井直樹・渡辺 明 監修

◎収録著作◎

ヴィルヘルム・フォン・フンボルト『言語と精神』より抄訳(1836年)

ノーム・チョムスキー「書評 B・F・スキナー『言語行動』」(1959年)

エリック・レネバーク『言語の生物学的基盤』より抄訳(1967年)

有限の手段を無限に用いることによって無数の言語表現を作り出す人間精神の働きこそが言語の本質であると指摘したフンボルト(Wilhelm von Humboldt 1767-1835)、行動主義心理学に基づく言語研究を徹底的に批判し、心・脳がもつ内在的言語能力の研究としての言語学を提唱したチョムスキー(Noam Chomsky 1928-)、言語の生物学的研究に関する総合的枠組みを提示したレネバーク(Eric H. Lenneberg 1921-1975)を取り上げる。

無意識と記憶

ゼーモン／ゴルトン／シャクター

高橋雅延・巖島行雄 監修

◎収録著作◎

リヒャルト・ゼーモン『ムネメ：有機的出来事の変遷過程で保持される原理』より抄訳(1904年)

フランシス・ゴルトン『人間の能力とその発達の探究』より抄訳(1883年)

ダニエル・L. シャクター『記憶を求めて：脳、心、過去』より抄訳(1996年)

19世紀後半以降、記憶研究は想起に内在する無意識的な過程に科学的に迫ろうとする。連想内容に過去の出来事の記憶が関係することを明らかにした人類学者ゴルトン(Francis Galton 1822-1911)、特異な概念を駆使し想起における無意識の積極的な関与を指摘したドイツの生理学者ゼーモン(Richard W. Semon 1859-1918)、潜在記憶研究で著名な現代の代表的研究者シャクター(Daniel L. Schacter 1952-)の著作から収録。

人工知能

チューリング／ブルックス／ヒントン

開 一夫・中島秀之 監修

◎収録著作◎

アラン・M. チューリング「計算機械と知能」(1950年)

ロドニー・A. ブルックス「象はチェスをしない」(1990年)

クリストファー・G. ラングトン「人工生命」(1989年)

ジェフリー・ヒントン「特徴量はどこから来るのか?」(2013年)

知能の本質は記号処理にあるとする物理記号仮説派の代表としてチューリング(Alan M. Turing 1912-1954)を取り上げ、パターン認識あるいはアンチ記号派として、ロボット用の新しいアーキテクチャーを提案したブルックス(Rodney A. Brooks 1954-)、人工生命という研究分野を立ち上げたラングトン(Christopher G. Langton 1949-)、深層学習のヒントン(Geoffrey E. Hinton 1947-)の三人を取り上げる。現代日本の関連分野研究者による座談会も併録。

